

古代における善光寺平の開発について 旧長野市街地の条里遺構を中心に

Ancient Development in the Zenkoji Plain:
Focussing on the Jori System Sites in Old Nagano City

福島正樹

はじめに

①善光寺平の条里

②旧長野市街地の表面条里の復原

③発掘調査の所見から

結びにかえて

【論文要旨】

善光寺平（長野盆地）は、千曲川・犀川によって形成された最大幅10km、南北30km、面積300km²の長野県内で最も広い盆地のひとつである。この地域は、古代においては、更級・水内・高井・埴科の4郡があい接し、『和名抄』に記載された郷の数や式内社の数をみると、信濃国で最も分布の密度が高い地域で、早くから開発が進んでいたところである。本稿はこの地域の条里的遺構について、特に旧長野市街地に存在した条里的遺構について検討を加え、用水体系との関連から古代における開発について検討したものである。

まず、この条里的遺構が旧長野市街地全体を覆う統一的なプランによっていること、この統一性は、用水体系からも裏付けられ、裾花川から取水された鐘鑄堰（川）・八幡堰（川）の計画的開削と合わせて施行された可能性が高いこと、施行の時期を直接示す考古学的データは今のところないが、更級郡の石川条里遺跡、高井郡の川田条里遺跡、埴科郡の更埴条里遺跡のいずれもが発掘調査の結果、条里地割の施行は8世紀末から9世紀初め頃であることが判明したことから、水内郡においても同様の時期と考えられることなどを論じた。

また、近世以前の善光寺東門・西門を結ぶ線（現在の仁王門）が条里的遺構の上に乗る、近世には「中道」と呼ばれていたことから、この線が高井郡へと向かう古代の官道の系譜を引くものである可能性について触れた。

最後に、以上の仮説から想定される8世紀から9世紀にかけての善光寺平の開発の諸段階について、現時点での考えを示した。